

聖書：士師記16章1～9節

説教：売られるサムソン

はじめに

前回までのあらすじを振り返ります。サムソンはユダの人々の手でペリシテ人に引き渡され殺されかけたとき、主の霊が下り、サムソンはろばのあご骨で千人を倒して大勝利を得ます。ところがハッと我に返ったサムソンは、激しい喉の渇きを覚えて主に救いを求めて祈ったところ、主が奇蹟的な方法で水を与え、彼はその日以来信仰者となり、イスラエルのさばきつかさになった。それから二十年経って何が起きたかが今日の箇所になります。この箇所のどこに神の恵みがあるのか。ご一緒に考えてまいります。

1 サムソン

1) 弱さ（敵の女）

1節。「サムソンはガザへ行き、そこで遊女を見つけて、彼女のところに入った。」いま激しい紛争が起きていて世界中がガザのことを心配しています。当時はペリシテ人の神であるダゴン神を祀っている大きな町だったといわれます。そのペリシテ人のことをサムソンはどう思っていたか。前回、サムソンはこう祈っていました。「今、私は喉が渇いて死にそうで、無割礼の者どもの手に落ちようとしています。」無割礼の者どもであるペリシテ人の手にかかって死ぬのはとても屈辱的なことだ。そう言っていたのに、のこのことペリシテ人の町に行き、遊女のもとに通う。これはどういうことでしょう。おまけに彼は過去にペリシテ人の女性のことと苦い経験をしているのです。二十年前、ペリシテ人の女性を妻にしようとしたら妻を殺されたことから大騒動になり、ユダの人々にも迷惑をかけた。ふつうなら近寄りもしないでしょう。それだけではない。前回見たとおりサムソンは、のどの渇きを覚えると、初めて主に祈る者に変えられ、信仰者となったはずではないのか。それなのになぜ同じようなことを繰り返すのでしょうか。

2) 信仰者となっても

皆さんはあるとき主を信じて救いをいただき、洗礼を受けられました。そのときどんなことを思いましたか。私のことを言えば、水でからだを洗い清めてもらったのだから、もう自分は罪を犯すことはないのではないか。漠然とそんなふうにも思った。ところがしばらく経ってわかってきたの

は、クリスチャンになったのに、依然として罪を犯している自分がいるということでした。それがわかったとき非常に戸惑いました。皆さんも同じ経験をされたのではないか。サムソンもそうです。信じたからもう罪を犯さなくなる、というのではない。信じてもお弱さをかかえ続けていく。これが信仰者の現実です。

2 デリラ

1) ペリシテ人の計画

ここでペリシテ人のほうに目を向けてみましょう。彼らはサムソンに対する恨みを忘れていません。ガザの人々はこのチャンスを逃すまいと待ち構えていたのですが、サムソンにまんまと裏をかかれ、町の象徴である門の扉や門柱を引き抜いて持って行かれ、大変な恥をかかされました。このまま終わるはずはありません。スパイを送り込み、サムソンの行動を監視させる。そうすると有力な情報が飛び込んできた。サムソンは、ソレクの谷に住むデリラのところへ足繁く通っているというのです。

2) 銀で売る

そこで彼らがデリラに言ったことばはこうです。5節。「サムソンを口説いて、彼の強い力がどこにあるのか、またどうしたら私たちが彼に勝ち、縛り上げて苦しめることができるかを調べなさい。そうすれば、私たちは一人ひとり、あなたに銀千百枚をあげよう。」

単純比較はできませんが、銀千百枚はいまならざっと家一軒分を買えるくらいの価値はあるそうです。デリラは迷うことなくこの話に乗る。6節。

「そこで、デリラはサムソンに言った。『どうか私に教えてください。あなたの強い力はどこにあるのですか。どうすればあなたを縛って苦しめることができるのでしょうか。』」サムソンに対する愛情などかけらもありません。甘い言葉でささやかけて力の秘密を聞き出そうとします。サムソンはのりくすりという態度で応じていますが、デリラにだまされていると気がつかなかったのか。そんなことはない。二十年前の結婚披露宴のときに起きた事件と同じパターンです。あそこで苦い思いをしているのですぐにピンときたはず。隣の部屋に潜んでいる待ち伏せのこともそうです。ガザに

泊まったとき、町の門に待ち伏せが潜んでいることに気がつくほどの人です。これは毘だに全部わかっている。ふつうならすぐ逃げるでしょう。ところがサムソンは、自分を金で売る女だと知っていてもデリラのもとに通い続けるのです。

3 イエス・キリスト

1) 銀貨で売られる

これはまともな判断ではありません。そんなサムソンと、イエス・キリスト。どこにも共通点がないように思いますが、一つだけある。イエス・キリストはご存じのようにユダに裏切られ、銀貨三十枚で売られて祭司長、律法学者たちの手に落ちていきます。サムソンも自分の愛した女性デリラに裏切られ、銀千百枚で売られてしまいました。今日の箇所ではまだサムソンは無事ですが、この後とうとう根負けしてしまったサムソンはデリラに秘密を漏らしてしまい、ペリシテ人の手に落ちていきます。

もちろんそれだけを見て共通していると言うのではない。大切なのは、サムソンがデリラの手で売られた結果、どうなったかです。先取りして言いますと、彼は目をえぐられ、手を引かれてふらふらしながら宴会の席に連れ出されていきます。そこに集まった人たちからさんざんに笑われて嘲られていたとき、彼は最後の力を振り絞って柱を倒し、家を崩壊させてペリシテ人に大損害を与え、イスラエルを救いました。イエス・キリストもユダの手で売られて十字架につけられ、そこでさんざんの笑いものになり、人々から嘲られ死んで行かれましたが、三日目の朝、死からよみがえられて、死に打ち勝ち、私たちに救いを与えてくださいました。

意外なことですが、女性のこととなるとめっぽう弱いサムソンの姿を通して、イエス・キリストの十字架が浮かび上がってくるように書かれています。

2) サムソンと私たち

でも思ってしまいます。イエス・キリストと結びつけるというのなら、だらしないサムソンではなく、もっとふさわしい人がいたのではないか。でも神は生まれるまえからサムソンを選ぶのです。彼がきよく正しく生きるか、それとも罪にまみれた生き方をするのか、そんなこととは関係なく選ぶのです。これはどういうことでしょう。

たとえば皆さんは、心のどこかに「理想のクリスチャンのイメージ」を思い描いたことはないでしょうか。“クリスチャンは聖い生活をし、聖書を

読み、絶えず祈り、罪を犯さず、神のみこころに従って歩むべきである。” できるなら私もこうありたいと思います。しかし現実はどうか。自分の心の中のことを見たら、とても聖い生活をしているとは思えない。何とかそれをごまかして、表に出ないようにしている。けれども、主は隠れたところをご覧になっています。そう考えたら、私たちはサムソンと大して変わらない。あんなサムソンでも主に変えられ、主を信じるようになり、イスラエルを救っていくようになる。サムソンでさえそうならば、私たちにも同じように主は関わってくださるはずではないでしょうか。

3) 弱さのうちに働く

皆さんは、自分の弱さや失敗が原因で人との関係がこじれてしまったとき、どう思ったでしょうか。また、自分と比べていろいろなことができる人を見て、どう思ったでしょうか。「私はだめな人間だ。生きる価値がない」と思うことはなかったですか。あるいは、もう罪は繰り返しませんと誓ったはずなのに、また同じ罪を繰り返してしまい、自分を責めて苦しんだことはなかったですか。そんな私たちに対し、神はどうされるのでしょうか。

サムソンを見てください。聖書は彼の弱さを包み隠さず赤裸々に描き出しています。女性に弱いという破れた穴のようなもののかかえていたサムソンです。神は彼を見捨てたのでしょうか。いいえ。まったく変わらずにサムソンを愛し続けます。まるで破れた穴を通して、主の救いのご計画が進んでいくようにさえしてくれる。

私たちは、自分の中に破れた穴を見つけると、なんとか塞がなければ、それができなければ取り繕わなければ恥ずかしいと思ってしまう。しかし主は違う。破れた穴から恵みを注いでくださる。これが私たちの主です。だから私たちは自分の強さを誇らなくてよい。むしろ弱さを主に告白していきます。弱さのうちに恵みを注いでくださる主とともに、また一週間歩んでまいります。